

病害虫発生予察情報（6月予報）

令和4年5月26日
静岡県病害虫防除所長

1 予報概況

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
稲	葉いもち	発生量：やや多 (発病株率 0.4%)	前年8月葉いもち発生量：多(+) 前年9月穂いもち発生量：多(+) 置き苗いもち：東部3地点(+) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(±)
	縞葉枯病 (ヒメトビウンカ)	縞葉枯病発生量：少 ヒメトビウンカ発生量：少 (発病株率 0.03%)	前年8月縞葉枯病発生量：少(-) 5月中旬ヒメトビウンカ発生量： 水田畦畔：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
	イネミズゾウムシ	発生量：やや多 (寄生株率 11.4%)	前年7月発生量：多(+) 5月の予察灯誘殺数：少(誘殺なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+)
	イネドロオイムシ	発生量：やや多 (東部高冷地：寄生株率 2.7%)	前年7月発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+)
	斑点米カメムシ類	発生量：やや多	5月中旬発生量：並(±) 5月の予察灯誘殺数：やや多(+) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
ばれいしょ	疫病	発生量：やや少	5月中旬発生量：少(-) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)
	ジャガイモガ	発生量：少	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
温州みかん	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (発生果率 0.3%)	5月中旬発生量(茶)：やや少(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
	ヤノネカイガラムシ	発生時期：並 発生量：並 (寄生葉率 0.1%)	5月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
	ミカンハダニ	発生量：並 (寄生葉率 7.3%)	5月上中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
中晩柑類	かいよう病	発病度(葉)：並 (発病度 0.4)	5月上中旬新梢発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
なし	黒星病	発生量：並	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
かき	落葉病	発生量：多	前年9月発生量：多(+) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：やや少 (寄生果率0.1%)	5月中旬発生量(茶)：やや少(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
	フジコナ カイガラムシ	発生量：少 (7月寄生果率0.8%)	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
キウイ フルーツ	かいよう病	発生量：やや多	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)
果樹全般	カメムシ類	発生量：並 (ただし、中部地域は、やや多)	越冬虫数：並(±) (ただし、中部：やや多(+)) 5月上中旬発生量：少(-) (ただし、中部：並(±)) フェロモントラップ誘殺数：やや多(+) (ただし、中部：多(+)) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(-)
茶	炭疽病	発生量：多 (病葉数葉3.7葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(+)
	もち病	発生量：多 (病葉数葉6.3葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：多(+) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(+)
	輪斑病	発生量：やや少 (病葉数葉1.5葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+)
	カンザワハダニ	発生量：やや少 (寄生葉率1.3%)	5月中旬発生量：やや少(-) 天敵(カブリダニ類)：少(+) 気象予報：気温：並か高い(±) 降水量：並か多い(-)
	チャノキイロ アザミウマ	発生量：並 (叩き落とし虫数 12.8頭/4か所)	5月中旬発生量：やや少(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
	チャノミドリヒメ ヨコバイ	発生量：やや多 (叩き落とし虫数4.2頭/4か所)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
	チャノホソガ	発生量：やや多 (巻葉数5.2葉/1.25m ²)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)

作物名	病害虫名	予報 (6月の県平均平年値)	予報の根拠
きく (施設)	白さび病	発生量：少 (前年6月発病株率：0.0%)	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(-) 降水量：並か多い(±)
	黒斑病・褐斑病	発生量：並 (前年6月発病株率：0.0%)	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+) 降水量：並か多い(±)
	えそ病 (トマト黄化えそ ウイルス：TSWV)	発生量：やや少 (前年6月発病株率：0.0%)	5月中旬発生量： えそ病：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+)
	アザミウマ類	発生量：やや多 (前年6月被害株率：26.8%)	5月中旬発生量：並(±) 気象予報：気温：並か高い(+)
	ハモグリバエ類	発生量：やや少 (前年6月被害株率：0.0%)	5月中旬発生量：少(発生なし)(-) 気象予報：気温：並か高い(+)
	オオタバコガ	発生量：多	トラップ誘殺量：並～多(±～+) 気象予報：気温：並か高い(+)

表の見方について

- ・ 予報の発生量は平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「少、やや少、平年並、やや多、多」の5段階で示しています。
- ・ 予報の発生時期は、時期の予想ができる病害虫に限り、平年(静岡県のごく10年間)との比較で、「早、やや早、平年並、やや遅、遅」の5段階で示しています。
- ・ 予報の根拠には、巡回調査に基づく発生状況(調査時期と発生量)、気象庁の1か月予報(気温と降水量)を記入しています。その状況が多発要因の場合は(+)、少発要因の場合は(-)を示し、+-を総合的に判断して発生時期、発生量を予想しています。

農薬情報
はこちら
で検索!



静岡県農薬安全使用指針
・ 農作物病害虫防除基準

<https://www.s-boujo.jp/>

2. 予報の根拠と防除対策

【稲】

<生育の概況等>

生育は平年並～やや遅い。

●いもち病(葉いもち)

予報の根拠

- ・ 昨年8月の巡回調査では、平均発病株率は5.9%（平年1.8%）と平年より多かった。また、昨年9月の巡回調査では穂いもちの発病株率は0.6%と平年より多かった（平年発病株率0.4%）。
- ・ 5月中旬の巡回調査では東部地区の3地点の置き苗に葉いもちの発生を確認した。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する（いもち病の発病好適条件は気温15℃～25℃、葉面の10時間以上の湿潤状態）。

防除対策

- ・ 置き苗は本田に植え付けた株よりも早期に葉いもちが発生し伝染源になりやすいため、田植え後できるだけ早く補植をすませ、不要な苗は速やかに処分する。
- ・ 常発ほ場では薬剤の予防散布を行う。
- ・ 急性型病斑（病斑周辺部に褐色部分がなく、暗緑色あるいはねずみ色の病斑）が多いときには、速やかに薬剤散布をする。
- ・ 本県ではMBI-D剤耐性いもち病菌が発生している。また近年、他県ではQoI剤耐性いもち病菌の発生が問題となっており、本県でも発生が懸念されるため、耐性菌の発生リスクが高い薬剤を使用する場合は、連用を避けるなど適切に使用する（詳細は「農薬安全使用指針・農作物病虫害防除基準（ホームページ<https://www.s-boujo.jp/>）」の「殺菌剤耐性菌に関する各種資料について」の項を参照）。

●縞葉枯病(ヒメトビウンカ)

予報の根拠

- ・ 前年8月の巡回調査では、縞葉枯病の平均発病株率は0.1%（平年0.6%）と平年より少なかった。
- ・ 5月中旬のヒメトビウンカの発生は、水田畦畔雑草では認められなかった（30回すくい取り平均捕獲数：平年0.01頭）。
- ・ 1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、本病を媒介するヒメトビウンカの増殖を特には助長しない。このため、本病の発生も特には助長されない。

防除対策

- ・ 本病の常発ほ場では、ヒメトビウンカの発生に注意する。イネが本病に感染しやすい幼穂形成期頃までを中心に防除を徹底する。
- ・ ヒメトビウンカはコムギ収穫後に水田に侵入するため、コムギ栽培ほ場の近隣の水田では6月上中旬に本田防除を実施する。
- ・ 発生地域の発生時期に当たる作付けでは、縞葉枯病抵抗性品種（あいちのかおり SBL）を利用する。

●イネミズゾウムシ

予報の根拠

- ・前年7月の巡回調査では、イネミズゾウムシの平均被害株率は4.7%（平成2.5%）と平成より多かった。
- ・各地の予察灯における5月上中旬の成虫誘殺は確認されていない（平成0.0～0.5頭／半旬）。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、薬剤を散布する。

●イネドロオイムシ(イネクビホソハムシ)

予報の根拠

- ・前年7月の巡回調査では、東部高冷地におけるイネドロオイムシの平均被害株率は6.8%（平成7.5%）と平成並であった。
- ・例年、6月以降は幼虫による食害が増加する。

防除対策

- ・常発地域で箱処理剤を使用していない場合や食害が顕著な場合は、幼虫が発生する6月中下旬に薬剤防除を行う。

●斑点米カメムシ類

予報の根拠

- ・5月中旬の畦畔等の雑草におけるカメムシ類の発生は平成並であった（30回すくい取り平均捕獲数2.9頭、平成2.9頭）。
- ・5月第3半旬時点の県内4ヶ所の予察灯における誘殺数は、アカスジカスミカメ及びミナミアオカメムシは平成より多く、アカヒゲホソミドリカスミカメは平成より少なく推移している（誘殺なし）。斑点米カメムシ類全体では、平成よりやや多かった。
- ・1か月予報では、気温は平成並か高いが、降水量は平成並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・畦畔及び水田周辺の除草は、カメムシ類の密度低下に有効である。なお、出穂直前および以降の除草はカメムシ類を水田内に移動させてしまうため、出穂10日前には除草を終了する。

<その他の病害虫>

●ニカメイガ

- ・前年9月の被害は平成より多かった（平均被害株率0.7%、平成0.4%）。
- ・5月第3半旬時点の予察灯およびフェロモントラップにおける誘殺数は平成より少なく推移している。

●トビイロウンカ

- ・5月第3半旬時点で予察灯での誘殺は確認されていない。
- ・本虫は梅雨の下層ジェット気流に乗り飛来する。日本における発生量は年によって大きく異なり、飛来源における発生状況や飛来時期、量、回数に影響される。また、世代交代を繰り返すことで急激に増殖し、数が増えてからでは効果が高い薬剤を使用しても十分な殺虫効果が得られない場合があるため、予防に重点を置いた防除を実施する。

●スクミリンゴガイ(ジャンボタニシ)

- ・前年6月の巡回調査では、スクミリンゴガイの平均発生面積率は48%（平年37%）と平年よりやや高かった。
- ・県内全域で分布が拡大している。1か月予報では、気温は平年並か高いため本貝の発生をやや助長する。
- ・移植後2～3週間は、食害を抑制するために浅水管理（4cm以下（理想は1cm以下））に努める。
- ・発生地域の普通期水田では移植後の薬剤処理を実施する。
- ・6月中旬～7月、水路壁面や畦波に赤橙色の卵が多数産卵されるため、見つけ次第卵をつぶす。なお、既に産卵や被害が確認されている地域もあることから、確認次第、防除を行う。
- ・スクミリンゴガイには寄生虫（広東住血線虫）が存在する可能性があるため、貝に触る場合は必ずゴム手袋をはめること。

【ばれいしょ】

<生育の概況等>

トンネル、マルチ栽培の生育は平年並である。露地栽培は平年よりやや早い生育である。

●疫病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病株率2.8%（平年10.7%）と平年より少なかった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は10℃を超えると活動が始まり、18～20℃が最適温度となる。開花期以降、気温が15℃以上かつ降雨により湿度が高い状態が継続すると発病しやすくなる。
- ・発病に最適な気温下で降雨が続くと本病は急速にまん延する。発病してからの防除は難しいので、継続した予防散布を行う。
- ・発病株や罹病残渣は伝染源となるので、圃場外へ持ち出し処分する。

●ジャガイモガ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、被害は確認されなかった（平年被害株率0.5%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・例年発生するほ場では注意が必要である。
- ・イモは露出しないよう土寄せをして産卵を防ぐ。
- ・掘り取ったイモは産卵防止のため覆いをかけ、刈り取った茎葉などと離し、早めに屋内に搬入して覆いをする。
- ・イモの残渣は発生源となるのでほ場に残さない。

【温州みかん】

＜生育の概況等＞

開花時期は平年より5日程度早い地域が多い。着花量は地域により差があり、平年並～やや多い。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・チャの巡回調査における発生量は平年よりやや少なかった。1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。
- ・アメダス気象データを用いた予測によると、5月24日以降の気温が平年並で推移した場合、多くのかんきつ産地では、第2世代成虫の発生時期は6月8日～20日（産地により発生時期が異なる）と予想される。各産地における発生時期の予想は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・各世代の飛来ピーク時期の1週間前から飛来ピーク時までが薬剤防除適期である。飛来ピークは年次や産地によって異なるので、静岡県病害虫防除所ホームページの情報を参考にして防除を行う。
- ・光反射シートマルチを利用する場合には、樹冠占有面積率60%以下の園地で、反射率90%以上のシートを全面被覆すれば、薬剤防除と同等の効果がある。
- ・本種を対象に炭酸カルシウム微粉末剤25～50倍を6月上旬と7月中旬に計2回散布することにより、6月から8月にかけて同種に化学殺虫剤を散布した場合とほぼ同等の防除効果が得られる。

●ヤノネカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は0.13%（平年0.06%）であったが、一部の多発園を除くと概ね平年並の発生量であった。
- ・県予察ほ場（静岡市清水区茂畑 標高約200m）では1齢幼虫の初発日は5月10日（昨年：5月6日）であった。防除適期の2齢幼虫最多発生時期は6月中旬と予想されるが、標高約100mより低い産地ではこれより1週間程度早くなる。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・本種の発生が少ない園では防除を省けるが、発生の見られる園では2齢幼虫の発生最盛期に薬剤散布する。

●ミカンハダニ

予報の根拠

- ・5月上中旬の巡回調査では、平均寄生葉率は2.0%（平年2.6%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。

防除対策

- ・最近では土着天敵の利用により6月の防除を省くほ場もある。ただし、寄生葉率が30%を超えるほ場では、寄生密度を下げるために薬剤による防除を行う。

<その他の病害虫>

●黒点病

防除対策

- ・病原菌は樹上やほ場内の枯枝で越冬し伝染源となる。前年、前々年と連続して黒点病は多発しており、ほ場内で菌密度が高まっていると考えられるため、ほ場からの枯枝の除去を徹底する。
- ・第1回目の防除は6月上旬に実施し、第2回目の防除は散布間隔 25～30 日又は累積降水量 250～300 mm を目安に行う。

●ゴマダラカミキリ

防除対策

- ・成虫は6月上旬に地際部から脱出し、葉や枝を1週間程度食害する。この時期に樹全体に薬剤散布することで、産卵前の成虫を防除できる。

【中晩柑類】

●かいよう病

予報の根拠

- ・5月上中旬の巡回調査では、新葉の発病は認められなかった（平年発病度 0.05）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・降雨の際に、病原菌は旧葉に形成された病斑から雨滴とともに飛散し、新葉が硬化する前に気孔や傷口から感染する。
- ・新梢に発病が見られるほ場では、降雨前に銅水和剤または抗生物質の散布を行う。なお、銅水和剤の散布では薬害を防ぐため炭酸カルシウム剤（200倍）を加用する。

【ハウスみかん】

<その他の病害虫>

●ミカンキイロアザミウマ・ネギアザミウマ

防除対策

- ・着色期の発生に注意し、初期防除に努めるとともにハウス内外の除草を徹底する。また開口部（側窓、天窗）に防虫網や光反射ネットを張ることで本種のハウス内への侵入を防ぐ。

【なし】

<生育の概況等>

生育は平年並～5日程度早い。着花量は地域により異なり、平年並～多い。

●黒星病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病果率0.10%(平年0.19%)と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・耐性菌の発生を抑えるため保護殺菌剤による予防散布に重点を置き、DMI剤(アンビル、インダー、オーシャイン、スコア、トリフミン、マネージ)は連用を避ける。

<その他の病害虫>

●黒斑病

防除対策

- ・幸水、豊水、静喜水は抵抗性品種で防除の必要はない。新水、喜水は罹病性品種で発病しやすいため、防除を行う。
- ・6～7月が発病まん延期であり、降雨状況に合わせて防除を行う。

【かき】

<生育の概況等>

生育は平年並の地域が多い。着花量は地域により異なり、平年並～多い。

●落葉病

予報の根拠

- ・前年9月の巡回調査では、発病葉率16.1%(平年5.4%)と平年より多かった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生を助長する。

防除対策

- ・本病は罹病した落葉が主要伝染源であり、雨水の飛沫とともに飛散し感染を拡大させる。
- ・5～7月が主な感染時期であり、60～120日の潜伏期間後に発病する。8月以降の散布では防除効果が見込めないため、5～7月の降雨前に予防散布を行う。
- ・本病は肥料不足、長雨などにより樹勢の弱った木に発生しやすいため、栽培管理に注意する。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・チャの巡回調査における発生量は平年よりやや少なかった。1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。
- ・アメダス気象データを用いた予測によると、5月24日以降の気温が平年並で推移した場合、第2世代成虫の発生時期は6月8日～20日(産地により発生時期が異なる)と予想される。各産地における発生時期の予想は、静岡県病害虫防除所ホームページを参照する。

防除対策

- ・本種は開花期から7月まで飛来し、加害する。初期防除が重要で、花卉落下期までの防除を徹底する。

●フジコナカイガラムシ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、果実に発生は認められなかった（平年寄生果率0.04%）。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない。
- ・アメダス気象データ（浜松）を用いた予測によると、5月24日以降の気温が平年並で推移した場合、防除時期となる1齢～2齢幼虫発生ピークは6月5日～18日と予想される。

防除対策

- ・例年この時期の発生は少ないが、7月以降に果実のへた部等で寄生がみられる。
- ・昨年発生が見られた園では発生に注意し、第1世代の若齢幼虫期（6月上中旬）に防除を行う。第2世代と第3世代では様々な齢期の個体が混在するとともに、生息場所である果実とへたの隙間が果実の肥大によって狭くなり薬剤が到達しにくくなるため、丁寧な散布を心がける。

<その他の病害虫>

●ハダニ類

防除対策

- ・多発すると落葉することもあるが、多くの場合は実質的な被害はない。多発園地では殺ダニ剤を散布する。

【キウイフルーツ】

<生育の概況等>

生育は地域により異なり、平年並～やや遅い。着花量は平年並である。

●かいよう病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病葉率は11.5%（過去6年の平均発病葉率13.2%）と平年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、本病の発生をやや助長する。

防除対策

- ・病原菌の生育適温は10℃～20℃であり、罹病樹から漏出した樹液が風雨により飛散することで気孔や傷口から感染する。
- ・細菌病であることから、樹体内に一度細菌が侵入してしまうと根本的な治療は難しい。予防防除を重点的に行い、発病樹は伐採するなど早期にほ場から除くこと。
- ・受粉結実後～果実肥大期までに予防散布をする。なお、使用する薬剤によっては薬害を生ずる時期なのでコサイド3000を使用し、薬害軽減のため炭酸カルシウム剤を加用する。
- ・キウイフルーツの葉は風で傷害を受けやすく、病原菌の新たな侵入路となるため防風対策を徹底する。
- ・管理作業によっても感染するため、せん定器具はこまめに消毒する。

【果樹全般】

●カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ)

予報の根拠

- ・今年1月における落葉中のチャバネアオカメムシ越冬量調査では、越冬成虫は1.0頭/m² (平年1.1頭/m²) と県全体として平年並の発生であった。ただし、中部地域の越冬虫数は1.8頭/m² (平年0.9頭/m²) と平年よりやや多かった。
- ・5月上中旬に実施した、かんきつの花における叩き落とし調査では、平均寄生虫数は0.7頭/5着花枝 (平年1.7頭/5着花枝) と県全体として平年より少なかった。ただし、中部地域の平均寄生虫数は1.6頭/5着花枝 (平年1.6頭/5着花枝) と平年並であった。
- ・県内6カ所に設置しているフェロモントラップにおける5月1日～15日の合計誘殺数の平均は、チャバネアオカメムシが40.0頭/箇所 (平年23.2頭/箇所) で平年より多く、ツヤアオカメムシが14.0頭/箇所 (平年20.0頭/箇所) で平年よりやや少なかった。果樹カメムシ全体では、55.0頭/箇所 (平年44.5頭/箇所) で平年よりやや多かった。ただし、果樹カメムシ全体では、東部地域で26.1頭/箇所 (平年55.2頭/箇所) と平年より少なく、中部地域で135.9頭/箇所 (平年26.2頭/箇所) と平年より多く、西部地域で10.8頭/箇所 (平年53.1頭/箇所) と平年より少なかった。

防除対策

- ・例年、うめ、もも、びわは収穫期まで被害果が発生する。かんきつ、かき、なし、キウイフルーツでは本格的なカメムシの被害は7月以降になる。
- ・ほ場での発生状況をよく観察し、発生が見られたら防除を行う。
- ・本年のチャバネアオカメムシ越冬数、フェロモントラップ・予察灯誘殺数の詳細は、静岡県病害虫防除所ホームページに掲載している。

【茶】

<生育の概況等>

5月中旬の巡回調査時では、一番茶の摘採はほぼ終了していた。

●炭疽病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は6.5葉/1.25 m² (平年1.6葉/1.25 m²) と平年よりも多かった。地域別では静岡北部地域11.8葉/1.25 m² (平年1.8葉/1.25 m²)、川根地域14.0葉/1.25 m² (平年1.8葉/1.25 m²) での発生が目立った。
- ・感染には新芽生育時に10時間以上の濡れが必要である。1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・降雨により胞子が飛散して感染するため、梅雨期となる6月は感染機会が多くなる。例年、発生が見られる茶園やすでに発病している茶園では、二番茶萌芽期から開葉期にかけて防除を行う。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し、2回目に治療剤を使用する。

●もち病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均発病葉数は21.2葉/1.25 m²(平年1.4葉/1.25 m²)と平年より多かった。地域別にみると富士山麓地域35.4葉/1.25 m²(平年1.1葉/1.25 m²)、静岡北部地域43.9葉/1.25 m²(平年3.0葉/1.25 m²)、川根地域26.9葉/1.25 m²(平年3.0葉/1.25 m²)と中山間地域での発生が目立った。これは5月中旬から降水量が多く、多湿な環境により発病が助長されたためであると考えられる。
- ・新芽生育時に降雨が多く、湿潤な日が続くと多発する。1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生を助長する。

防除対策

- ・高湿度条件下で孢子が飛散して感染するので、風通しの悪い山間地域茶園等では発生しやすい。潜伏期間が10日程度と短いため、二番茶摘採期の頃に発生する。本年度は特に山間部を中心に一番茶残葉において多発しているため、整枝後の防除作業を徹底する。なお、薬剤防除を2回実施する場合には、1回目に予防剤を使用し、2回目に治療剤を使用する。

●輪斑病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発生が見られなかった。(平年平均発病葉数0.02葉/1.25 m²)
- ・発病は25℃以上の高い気温が好適である。1か月予報では、気温は平年並か高いため、本病の発生をやや助長する。なお、本病の発生に降雨量は関係しない。

防除対策

- ・摘採や整枝によってできた傷口から発病が始まるため、常発茶園では二番茶摘採後に速やかに防除を行う。なお、摘採直後に防除ができない場合は、整枝時に摘採面より2cm程度深く刈り、その直後に薬剤散布を行う。

●カンザワハダニ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、摘採面での平均寄生葉率は1.4%(平年2.8%)と平年よりやや少なかった。また、天敵のカブリダニ類の叩き落とし虫数は0.2頭/4か所(平年1.2頭)と平年より少なかった。
- ・例年、6月の発生は天敵のカブリダニ類により抑制される。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いが、降水量は平年並か多いため、発生は特には助長されない。

防除対策

- ・天敵の活動等により、6月は5月に比べ発生は少なくなるが、降雨が少なく乾燥すると発生が多くなる恐れがある。このため、天候及び本種の発生状況に注意する。現在、発生の多い茶園では早めに防除を行う。

●チャノキイロアザミウマ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は3.2頭/4カ所（平年5.8頭/4カ所）と平年より少なかった。
- ・例年、二番茶生育期から発生が増加する。1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年並か高いため、発生はやや助長される。

防除対策

- ・二番茶以降の萌芽から開葉期にかけて防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加する可能性があるため、発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノミドリヒメヨコバイ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均叩き落とし虫数は1.8頭/4カ所（平年1.6頭/4カ所）と平年並であった。
- ・防除員からの報告（5/23時）では、「やや多い」回答が11名中3名あった。
- ・1か月予報では、降水量は平年並か多いが、気温は平年並か高いため、発生はやや助長される。

防除対策

- ・例年、二番茶生育期から発生が増加するので、新芽の開葉期に防除を実施する。
- ・一番茶摘採後の更新園では、6月から7月にかけて再生芽への寄生が増加すると被害が大きくなるので、発生状況に注意し、再生芽の生育期に防除を実施する。

●チャノホソガ

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均巻葉数は1.0葉/1.25m²（平年0.9葉/1.25m²）と平年並だった。
- ・県内各地のフェロモントラップへの誘殺時期は、ほぼ平年並～やや早い。
- ・1か月予報では、降水量は平年か多く、気温は平年並か高いため、発生をやや助長する。

防除対策

- ・幼虫の発生が新芽生育期に合致すると被害が大きくなるので、地域の予察灯やフェロモントラップにおける誘殺虫数の推移や新芽への産卵状況に注意し、適期防除に努める。なお、成虫の誘殺データについては静岡県病虫害防除所ホームページで情報提供している。

<その他の病虫害>

●チャハマキ・チャノコカクモンハマキ

防除対策

- ・5月中旬の巡回調査では、チャハマキの平均寄生虫数は1.2頭/1.25m²（平年0.4頭/1.25m²）、コカクモンハマキの平均寄生虫数は0.5頭/1.25m²（平年0.1頭/1.25m²）と、平年よりも多かった。
- ・成虫に活性のある殺虫剤で防除する場合は、発生に注意し、各地域の発蛾最盛期頃を目安に散布する。

●ナガチャコガネ

防除対策

- ・成虫は年1回6月頃に発生するので、成虫発生初期(6月上中旬)に被害が出た場所とその周辺部を対象として薬剤を処理する。
- ・成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。

【きく(施設)】

<生育の概況等>

生育は平年よりやや遅い。

●白さび病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発生は認められなかった(前年発病なし)。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生を特には助長しない(本病の発病適温17℃前後)。

防除対策

- ・発生ほ場では、罹病性品種を中心に薬剤散布を行う。ただし、薬剤によっては薬害が出やすいので、新しい品種では小規模の試し散布を行う。
- ・多湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。

●黒斑病・褐斑病

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった(前年発病なし)。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高く、降水量は平年並か多いため、発生をやや助長する(本病は特に降雨が続くと発生が多くなる。病原菌の生育適温は黒斑病24~28℃、褐斑病20~28℃)。

防除対策

- ・本病は潜伏期間が長く発病後の防除では手遅れとなるので、薬剤の予防散布を行う。
- ・多湿で発生が助長されるため、梅雨期には特に多発に注意する。
- ・発病葉は感染源となるため速やかに摘み取り、ほ場外に持ち出して適切に処分する。
- ・土の上に落ちた被害葉が伝染源となるため、被害葉をほ場に放置しない。
- ・親株が罹病しているとそこから新芽に伝染し、定植してから発病することが多いため、発病が見られる株を親株として用いない。

●えそ病(トマト黄化えそウイルス:TSWV)

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、発病は認められなかった(前年発病なし)。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、媒介虫であるミカンキイロアザミウマの増殖をやや助長する。このため、本病の発生もやや助長される。

防除対策

- ・発病株は伝染源となるため速やかに抜き取り、土中に埋める等して適切に処分する。
- ・ミカンキイロアザミウマはトマト黄化えそウイルスを媒介するため、食害が認められる場合には速やかに薬剤散布を実施する。
- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、アザミウマ類の侵入を抑制する。

●アザミウマ類(クロゲハナアザミウマ、ネギアザミウマ、ミカンキイロアザミウマ)

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、平均被害株率は4.3%（前年4.4%）と前年並であった。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本虫の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・定植後の初期防除に努める。
- ・親株は発生源となる可能性があるため、採穂後は親株をほ場に放置せず、速やかに処分する。
- ・施設開口部に防虫ネット（目合い0.4mm以下）を設置し、侵入を抑制する。
- ・ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の侵入源となるため、ほ場周辺の除草を行う。

●ハモグリバエ類(マメハモグリバエ)

予報の根拠

- ・5月中旬の巡回調査では、被害は認められなかった（前年被害なし）。
- ・夏期はハモグリバエ類の天敵（寄生蜂）の活動により密度が抑制されやすい。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本虫の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・葉に1mm程度の白い斑点（産卵痕及び摂食痕）が多数見られる場合は、薬剤散布を実施する。

●オオタバコガ

予報の根拠

- ・浜松市のキク産地及び磐田市に設置しているフェロモントラップにおける誘殺数は、平年並〜多く推移している。なお、成虫の誘殺データについては病虫害防除所ホームページで情報提供している。
- ・1か月予報では、気温は平年並か高いため、本虫の増殖をやや助長する。

防除対策

- ・例年7月以降に幼虫の発生が増加するが、6月から芽における被害の発生に注意し、初期防除に努める。

3. 季節予報

● 1か月予報 (東海地方 令和4年5月19日 名古屋地方気象台発表)

【予報期間】 5月21日から6月20日

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月	天候	期間の前半は、天気は数日の周期で変わるでしょう。 期間の後半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。
	気温	平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。
	降水量	降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。
	日照時間	日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。
1週目	気温	1週目は、平年並の確率50%です。
2週目	気温	2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。
3～4週目	気温	3～4週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

【確 率】

期間	要素	低・少	平年並	高・多%
1か月	気温	20	40	40
1か月	降水量	20	40	40
1か月	日照時間	40	40	20
1週目	気温	20	50	30
2週目	気温	20	40	40
3～4週目	気温	20	40	40

【予報の対象期間】

1か月	:	5月21日(土)～	6月20日(月)
1週目	:	5月21日(土)～	5月27日(金)
2週目	:	5月28日(土)～	6月3日(金)
3～4週目	:	6月4日(土)～	6月17日(金)

※ 利用上の注意

- ・気温・降水量は「低い(少ない)」「平年並」「高い(多い)」の3つの階級で予報します。階級の幅は、1991～2020年の30年間における各階級の出現率が等分(それぞれ33%)となるように決めてあります。(気候的出現率と呼びます)。
- ・晴れや雨などの天気日数は、平年の日数よりも多い(少ない)場合は「平年に比べて多い(少ない)」、また平年の日数と同程度に多い(少ない)場合には「平年と同様に多い(少ない)」と表現します。なお、単に多い(少ない)と表現した場合には対象期間の2分の1より多い(少ない)ことを意味します。

お問い合わせは

静岡県病害虫防除所 〒438-0803 磐田市富丘678-1 TEL 0538-36-1543 FAX 0538-33-0780 URL https://www.agri-exp.pref.shizuoka.jp/boujo/boujo.html
--